

人間を尊敬することが

文化の基礎である

津守 真

敗戦後五〇年の記念の年、私は自分自身が子どもにかかわってきたこの五〇年間をも顧みて、特別に身の引き締まる思いで正月を迎えた。

正月が終わり、仕事が常に戻ろうとした日の早朝、私共は阪神大地震の報に驚かされた。私はすぐに五〇年前の戦争直後、日本中が焼け野原のころを思い出した。

戦争が終わつたとき、多くの日本人が平和を決意した。日本の国を一度と戦争をしない平和の国にしたいと思った。五〇年たつたいま、身辺を見回すと、子どもの自殺が相続ぎ、学校の中の「いじめ」が社会問題になつてゐる。私共の国は戦争はしていないが、幸

せな社会とは言いたい。戦争が終わったときから今までの間に、私共の中で何が起こっていたのか。人間が幸せに生きられる社会、文化国家の建設を目指しながらそくなつていなるのは何故なのか。

現代のいじめのことを考えるとき、私はすぐに私自身の軍隊の体験を思い起こす。私は大学一年生のときに召集されて兵隊にいった。私共一兵卒が最も苦しめられたのは、下士官の「いじめ」によってだった。彼らは上官にへつらい、階級の下の者には何をしてもいいと考えていた。自分を超越した方（神）の前に人々は互いに対等の存在であるという人間の根底にまでさかのぼって考えようとなかった。そして国家の名の下に個人的な感情や人間の尊厳を犯した。同じことがいま学校の中で起こっているのではないか。教師は子ども們ひとりひとりの独自の生き方を尊敬しない。同様に、上級生は下級生を自分の手下として支配しようとする。日本人の集団には、この軍隊の下士官心理が根深く残っている。教育や福祉のように閉鎖的で巨大な集団でそれは特に顕著である。教室という人の目に触れない場所では、大人は自分勝手になり、怠慢になる可能性を常にはらんでいる（ここに子どもの権利条約の意義がある）。

戦後五〇年を経、日本の国は戦争中の近隣諸国に対して、歴史的視点に立つて、謝罪すべきことは率直に謝罪せねばならないと私は思う。たとえば南京虐殺も従軍慰安婦も、当時を生きた多くの者は、自分が直接にかかわらないまでも、当然ありえたと考えると思

う。私もそのひとりである。なぜそういうことが起こったのかを身近なことから考へると、私は日本人の集団のこの下士官心理が関係していると考へる。

自分が継続的にかかわる保育の小さな集団では、皆が民主的に成長する場をつくるのは比較的容易である。大人も子どもも同じ床の上で、人間として平等の者として立つ。それが自分らしく生き、相手の動きに敏感になるように努めることからそれははじまる。それが保育の場である。すなわち、自分をも他人をも尊敬することがその基礎にある。

子どもの活動の側からこれを考えてみると、子どもがはじめた遊びを尊重されることから、その子らしい次の遊びが生まれる。他の子どももそれに自分らしく遊んでいるのを傍らに見ると、子どもはその楽しさに引き込まれ、そこに共通の活動が生まれる。集団全体が力動的になり、創造的になる。保育者もその中の一員である。そこでだれかが自分の観点を絶対と考えて、相手の考えや動きを無視し、相手を支配しようとすると集団は生命性を失い、画一的になる。

五〇年前の戦争直後、文化国家の建設ということが青年の目標であった。私は子どもの仕事を文化と結び付けて考へた。文化とは何かを分かりもしないままに、障害児の教育は一国の文化のバロメーターであると思つた。私は先日、障害の人と共にすることを原則と

するウォルフガング・シュタングのワークショップで、ダンスの基礎は、ひとりひとりの人間を尊敬するところにあると彼が明言するのを聞いて、このことがはつきりしたように思つた。形がととのつて立派でも、人間に對する尊敬がなければ文化としては根の浅いものになる。障害があつてもなくとも、どの子どもをも人間として尊敬する教育がなかつたら、どんなに立派な美術館やコンサートホールが沢山建てられても、それだけでは文化國家とは言えないとさう。

この度の阪神大地震では、日を経るにつれて災害の激しさが知られて来る。沢山の幼稚園、保育園はどうやって立て直されるだろうか、私立の保育者養成機関などはどうやって再建されるのだろうか。どんなに大変か、外部の人の想像に絶するものがあるだろう。しかし、もしかするとこの瓦礫のなかに、戦後五〇年の間に私共日本人が失いかけていた人間の精神が息吹いているのかもしれない。

このようなことが起つた年、八月一日—四日に、OMEП世界大会が横浜パシフィコで開かれる。

阪神大地震から数日後には、元OMEП世界総裁のマデリン・グタール女史から、次の手紙を受け取つた。「今日、ラジオが、日本で起つた恐ろしい大地震の報を伝えまし

た。私はショックを受けています。多くの失われた生命、一その中には多くの子どもたちも含まれているでしょーーーの哀悼の中にある、愛するあなたの国を思い、私はこの上なく悲しんでおります。日本のOMEPEの方々の無事を願っています。ことに私の知っている友人たちのことを思っています。私の深い関心と同情の念を皆様にお伝えください。

一九九五年一月十七日」

それから数日の間に、前世界総裁、ノルウェーのバルケ女史、現世界総裁、カナダのピノー女史、イスラエルのジャシック女史、デンマークのヴィリアン女史、イギリスのカーティス女史、イギリスのデヴィッド女史等々から次々にお見舞いの手紙やファックスをいただいた。私共と同じように子どもの仕事をしている方々が、こうして私たちのことを思つていてくださることを考えると不思議である。この前の戦争のときには、心の中で心配して下さっていた方は大勢あつただろうが、こうして直ちにファックスや航空便で安否をたずねられることはなかつた。これは技術の進歩だけのことではない。子どものことに同じ関心を抱く人々の国際組織があるからである。OMEPEを通じて私共は心を通わせ合うことができる。

(愛育養護学校)